謹呈

皆見教授御業績並に御指導業績追加

九州大學醫學部皮膚科教室編

目次

一、序にかえて　樋口謙太郎
二、皆見教授著書追加
三、皆見教授御業績追加
四、皆見教授御指導業績追加
五、九大皮膚科十七年間の主なる業績回顧　皆見省吾
六、前九州大學教授皆見先生御功績　荒川忠良
七、皆見教授御退職講演會、記念式並に謝恩會記事　野間祐輔

序にかえて

恩師皆見先生の御業績集は昭和十六年先生の九大御在職十周年記念の際、それまでのものを蒐めて出版し、皆様のお手許に差上げたが、その後先生の昭和二十三年四月三十日御退職までの分をこゝに追加する。もつと早く出す計畫であつたが、業績の雜誌掲載が大變延引したため、この業績集も段々と遲れてしまつた。體裁は十周年記念號と同一にし論文の番號もそれに踵いで附けた。但し前回は詳しい人名及物名索引がつけられたが、今回は印刷の都合上省略した。猶皆見先生の御退職記念會にて話された回顧談、その式の模樣並に先生の御功績記事をも卷末に載せた。本當ならばこの際先生の御業績全部を蒐錄すべきであるが、遺憾ながら今日の印刷其の他の事情が之を許さない。體裁も前回に比し甚だ粗末なものとなつてしまつた。この點皆見先生に厚くお詫びをせねばならぬと思つてゐる。十周年記念號の附錄として御保存を乞ふ。

十周年紀念號はまだ可なり殘つてゐる故希望の方は申出られゝばお屆けする。（樋口記）

皆見教授著書追加

五、梅毒の診斷と治療　大道學館出版部　昭二一

六、蕁麻疹の療法　日本醫書出版株式會社　昭二一

七、梅毒の最新療法　民風社　昭二三

八、皮膚科診療叢書　山野書店　昭二三

九、皮膚病黴毒學（重版）　南山堂書店　昭二四

皆見教授御業績追加（昭和十七年—昭和二十四年）

二三〇、サルバルサンビオトロピスムとしての獅腫症　診療と經驗　六卷五六號　昭十七年　青島　盛共著
二三一、ペロナール疹　實驗醫報　三二七號　昭十七年　青島　盛共著
二三二、熱帶皮膚病　醫界週報　三六八號　昭十七年
二三三、大東亞共榮圏の癩　日醫健保　三二七二號　昭十七年　大隈敏夫共著
二三四、線狀神經皮膚炎　皮と泌　十卷一號　昭十七年　伊藤衞門共著
二三五、ホルムアルデヒド葡萄糖液の皮膚科領域に於ける應用　治療處方　二六四號　昭十七年　光本重信共著
二三六、皮膚科に於ける最新療法　實地醫家　十九卷四號　昭十七年
二三七、卵巢ホルモンによる肝斑　皮と泌　十卷二號　昭十七年　岡元健一郎共著
二三八、アレルギー性皮膚炎　アレルギー時報　八卷三冊　昭十七年
二三九、扁平紅色苔癬の治驗　東西醫學　九卷五號　昭十七年　奥野勇喜共著
二四〇、ヴイダール苔癬特に其治療　臨講　一四四號　昭十七年　和田智來共著
二四一、スルファミン固定疹　實地醫家　十九卷五號　昭十七年　青島　盛共著
二四二、進行性指掌角皮症は如何に治療すべきか　治療誌　十二卷六號　昭十七年　和田智來共著
二四三、Über das Chloasma palpebrarum. Japanese Journal of Medical Sciences. Part XIII Dermat. and Urology, Vol. I, No. 3. 昭十七年　和田智來共著
二四四、結節性結核性動脈炎　皮と泌　十卷三號　昭十七年　和田智來、伊藤衞門共著
二四五、新產兒剝脫性皮膚炎　阪醫事誌　十三卷七號　昭十七年　椛島强一共著
二四六、結節性紅斑に對するツベルクリン下腿皮下注射反應　皮と泌　十卷四號　昭十七年　青島　盛共著
二四七、キニーネ疹　皮と泌　十卷五號　昭十七年　和田智來共著

二四八、白癬風と甲狀腺　皮と泌　十卷六號　荒川忠良共著
二四九、鱗狀毛囊性角化症（土肥）　皮と泌十一卷一號　昭十八年　伊藤衞門共著
二五〇、癩に對する椰子油の治驗　治療處方　二七九號　昭十八年　吉田重春共著
二五一、癌の皮膚轉移に就て（臨床講義）　診療と經驗　七卷五冊　昭十八年　伊藤衞門共著
二五二、痘瘡樣乾癬　皮と泌　十一卷三號　昭十八年　下山忠興共著
二五三、育藥（寶藥）に因る腐蝕に就て　皮と泌　十一卷四號　昭十八年　田中弘士共著
二五四、エスブンヂアに就て　皮と泌　十一卷五號　昭十八年　田中弘士共著
二五五、稍非定形的な多形滲出性紅斑　日本臨床　一卷五號　昭十八年　吉田重春共著
二五六、鬚髯部ボックハルト膿痂疹　醫界週報　四四八號　昭十八年　松山龜之助共著
二五七、癩性斑紋特に白斑に就て　レプラ　十四卷六號　昭十八年　吉田重春共著
二五八、亞急性剝脫性紅皮症に就て　皮と泌　十一卷六號　昭十八年　高阪義一郎共著
二五九、梅毒に對する三劑併用療法　臨牀と研究　二一卷六號　昭十九年　田中弘士、高岡弘道共著
二六〇、梅毒治療法管見、特にサルバルサンの大量注射に就いて　皮性誌　昭十九年　五五卷七號
二六一、結節性並に硬結性紅斑に對するセファランチン治驗　臨牀と研究　二一卷七號　昭十九年　井上忠彥共著
二六二、梅毒の治療、特に短期强力療法に就て（第二回）　臨牀と研究　二二卷一號　昭二十年
二六三、白癬菌の殺菌試驗並に水虫、其他の白癬及潰瘍の治療に就て　臨牀と研究　二二卷二號　昭二十年
二六四、サルバルサンの解毒實驗　臨牀と研究　二二卷三號　昭二十年
二六五、サルバルサンの解毒實驗補遺　臨牀と研究　二二卷六—八號　昭二十年
二六六、梅毒の短期强力療法に就て（第三回）　臨牀と研究　二三卷三號　昭二一年
二六七、梅毒の短期療法（第四回）　臨牀と研究　二三卷五號　昭二一年　高森通夫共著
二六八、邦人に發生せるフランベシヤに就て　臨牀と研究　二三卷八號　昭二一年
二六九、藥皮膚炎　醫學　一卷三號　昭二一年　的野義博共著
二七〇、今年經驗せる眞痘、假痘及無疹痘に就て　日本臨床　四卷一二號　昭二一年　荒川忠良、弘中哲也共著

二七一、梅毒の强力療法（第五回）　最新醫學　一卷六號　昭二一年　高森通夫共著

二七二、梅毒の短期强力療法（綜說）　日米醫學　一卷五―六號　昭二一年

二七三、紅色叢風並に叢風の治療　診斷治療　三四卷九號　昭二一年　齋藤金之助共著

二七四、囊尾虫症に就て　醫學　三卷三號　昭二二年　一木象二郎共著

二七五、粥腫症に就て　臨床皮泌　一卷三號　昭二二年

二七六、結核性結節性靜脈炎特にセファランチンによる治驗　臨床皮泌　一卷二號　昭二二年　弘中哲也共著

二七七、皮膚疾患に對するエキゾールの治驗　診斷治療　三九卷三號　昭二三年　荒川忠良共著

二七八、梅毒の療法特に强力療法について　第四七回九州醫學會特別講演集　昭二三年

二七九、顏面膿瘍性穿掘性毛包周圍炎について　東京醫誌　六五卷五號　昭二三年　持尾長年共著

二八〇、ヂメチロールの治驗　臨牀と研究　二五卷六號　昭二三年　太田三郎共著

二八一、食物と皮膚疾患　榮養と料理　一四卷二號及八號　昭二三年　荒川忠良共著

二八二、汎發性結節症に就て　臨牀皮泌　三卷一號　昭二四年　持尾長年共著

二八三、蕁麻疹に對するマスチゲンの治驗　最新醫學　四卷二號　昭二四年　野間祐輔共著

皆見教授御指導業績追加

昭和十七年

九六七、普通のカメラを用ひて行ふ簡易顯微鏡寫眞撮影法　醫と生　一卷四號……青島盛

九六八、皮膚疾患に於ける尿中ポルフイリン　皮と泌　十卷一號……木村木支雄

九六九、廣東地方の熱帶潰瘍　皮と泌　十卷一號……望月仁三

九七〇、陳舊梅毒の各血液に於ける補體量及び正常山羊血球溶血素並に驅梅の影響　皮と泌　十卷一號……住吉義級

九七一、第四指端掌側感覺異常症　皮と泌　十卷一號……和田智來

九七二、環狀肉芽腫　皮と泌　十卷一號……宮川梁次

九七三、先天性脫毛症　皮と泌　十卷一號……青島盛

九七四、俗稱臺灣坊主（圓形脫毛症）の名稱に關する考察　皮と泌　十卷一號……青島盛

九七五、健康人皮膚のヒスタミン量　皮性誌　五一卷二號……光木重信

九七六、濕疹の發生に及ぼす早魃の影響　臨皮泌　七卷三號……青島盛

九七七、刺戟と皮膚 Histamin　皮性誌　五一卷三號……光木重信

九七八、インズリンショック及び電氣ショック時に於ける血液內ヒスタミン量　皮性誌　五一卷四號……光木重信

九七九、皮膚科並に他科領域に於ける諸疾患の Formolgel 反應に就て、殊に Virus 性疾患に於ける本反應の成績に就て　血液免疫學誌　三卷一號……青島盛

九八〇、小兒ストロフルスとミノファーゲンC　治療誌　十二卷四號……樋口謙太郎　星木亨淳　阿部薫

九八一、ペロナール疹　體性　二九卷四號……青島盛

九八二、福岡市國民學校兒童の皮膚病に就て　實地醫家　一九卷四號……和田來盛　安藤智夫　服部武郎

九八三、皮膚結核及び類結核の諸檢査　皮と泌　十卷二號……安藤武夫

九八四、釀母菌性爪甲並に爪周圍炎　皮と泌　十卷二號……奥野勇喜

九八五、發毛に對するコレステリン油の應用　皮と泌　十卷二號……和田智來

九八六、菌培養に關する考察　皮と泌　十卷二號……青島盛

九八七、小野氏梅毒著色反應　體性　三〇卷五號……樋口和田政謙智太郎來嗣

九八八、Gymnoascaceae による斑狀落屑性白癬　醫と生　一卷十一號……樋口謙太郎

九八九、Formaldehyd 葡萄糖液の局所性過敏反應に及ぼす影響　皮性誌　五一卷六號……光本重信

九九〇、諸種ホルモン劑、植物神經毒並にヒスタミン解毒劑のサルバルサン過敏症に及ぼす影響　皮性誌　五一卷六號……大隈敏夫

九九一、ワ反應銳敏化法特に福田氏抗體ノルモザン處理法に就て　體性　二九卷六號……佳吉義級

九九二、アロフイリンの發毛作用　體性　二九卷六號……和田智來

九九三、再發性濕疹と氣象との關係　皮と泌　十卷三號……青島盛

九九四、梅毒患者の血壓並びに驅梅療法による動搖　皮と泌　十卷三號……佳吉義級

九九五、黑色表皮腫　皮と泌　十卷三號……奥野勇喜

九九六、開口部糜爛性外皮症の一例　皮と泌　十卷三號……岡元健一郎

九九七、青色母斑の經過　皮と泌　十卷三號……伊藤衛門

九九八、Haut und Histamin. Japanese Journal of Medical Sciences, Part XIII, Dermat. and Urology. Vol II, No. 3. ……光本重信

九九九、關節部結節　皮と泌　十卷三號……吉田重春

一〇〇〇、何故餅が皮膚病に惡いか　皮と泌　十卷三號……和田智來

一〇〇一、皮膚結核の臨牀的檢索　臨講　一四五號……富川梁次

一〇〇二、所謂結核疹の臨牀的檢索　阪醫事誌　十三卷六號……西川脇口清亨祐

一〇〇三、性病のズルフオンアミド療法輓近の趨勢　實地醫家　十九卷七號……樋口謙太郎

一〇〇四、鼠癰菌培養の小實驗　レプラ　十三卷四號……和田智來　安藤武夫

一〇〇五、皮膚科領域に於けるビタミンCの研究（一）皮性誌　五二卷一號……重松俊

一〇〇六、皮膚科領域に於けるビタミンCの研究（二）皮性誌　五二卷二號……重松俊

一〇〇七、成人鵞口瘡の一例　皮と泌　十卷四號……奥野勇喜

一〇〇八、白癬性苔癬を併發せるツエルズース黍瘡　皮と泌　十卷四號……青島盛

一〇〇九、汎發性結痂性白癬　皮と泌　十卷四號……今井鎌幸介

一〇一〇、サルヴァルサンアグラヌロチトーゼの一例　皮と泌　十卷四號……川上誠一

一〇一一、增殖性天疱瘡の一例　皮と泌　十卷四號……和田智來

一〇一二、痘瘡狀急性膿疱症の一異型　皮と泌　十卷四號……樋口部謙太郎

一〇一三、皮膚とヒスタミン　皮と泌　十卷四號……光本重信

一〇一四、皮膚科領域に於けるホルムアルデヒド高張葡萄糖液の治驗例　治療誌　十二卷八號……樋口本謙太郎　阿部謙重　光信薫

一〇一五、水銀燻蒸療法と其中毒例に就いて　治療處方　二七一號……樋口木謙亨太　星樋淳郎

一〇一六、皮膚科領域に於けるビタミンCの研究(三)　皮性誌　五二卷四號……重松俊

一〇一七、大腸菌性皮下蜂窩織炎の一例　皮と泌　十卷五號……奥野勇

一〇一八、蕁麻疹患者の皮膚感覺過敏と發斑形成に對するヒスタミンの役割に就て　皮と泌　十卷五號……光本重信

一〇一九、βキノンの發毛抑制作用　皮と泌　十卷五號……和田智來

一〇二〇、某大學學生の梅毒反應檢査成績に就て　皮と泌　十卷五號……樋口田謙智太郎　和樋來

一〇二一、皮膚科に於けるレ線間接照射の治療（第二回報告）皮と泌　十卷五號……椛島強一　奥野勇喜

一〇二三、古湯及び熊の川溫泉（佐賀縣）調査記　皮と泌　十卷五號……樋口謙太郎
一〇二三、溫度と細菌　醫と生　二卷九號……和田智來
一〇二四、螢光顯微鏡による組織內結核菌の證明　醫と生　二卷十號……和田智來
一〇二五、汗口角化症の一家系に就て　體性　二九卷十一號……青島盛
一〇二六、消化管內釀母菌の意義　實驗醫報　二八卷三二九號……樋口謙太郎
一〇二七、陳舊梅毒患者各血液型の定量的ワ反應並に治療經過觀察　皮と泌　十卷六號……住吉義級
一〇二八、シャンバーク病　皮と泌　十卷六號……和田智來
一〇二九、葦皮症　皮と泌　十卷六號……吉田重春
一〇三〇、廣東の熱帶潰瘍（第二報）皮と泌　十卷六號……望月仁三
一〇三一、圓形脫毛症に於ける肝臟機能檢査　皮と泌　十卷六號……木村支雄
一〇三二、別府明礬溫泉調査記　皮と泌　十卷六號……奧野勇喜

昭和十八年

一〇三三、皮膚科領域に於ける血中 Glutathion の研究（第一篇　諸種皮膚疾患者に於ける血中 Glutathion）皮性誌　五三卷一號……高岡弘道
一〇三四、皮膚科領域に於ける血中 Glutathion の研究（第二篇　皮膚疾患の經過と血中 Glutathion の消長並に實驗的皮膚炎家兎に於ける Glutathion の消長）皮性誌　五三卷一號……高岡弘道
一〇三五、諸種ホルモン劑の雄性海猽生殖器の發育に及ぼす實驗的研究　日泌誌　三四卷二號……朝原達雄
一〇三六、スポロトリコーゼの一例　皮と泌　一一卷一號……伊藤衞門
一〇三七、紫外線及びレントゲン線とヒスチヂン　皮と泌　一一卷一號……光本重信
一〇三八、ポルフイリン尿と網狀織內被細胞系機能　皮と泌　一一卷一號……木村木支雄
一〇三九、筑豐炭田半島人坑夫に蔓延せる頑癬に就て　皮と泌　一一卷一號……樋口謙太郎・岡元一郎・前原健東作

一四〇、癩患者の血中食鹽量　レプラ　一四卷一號……和田智來

一四一、サルバサン過敏症に於ける局所皮膚並びに淋巴腺の組織學的所見に就て　皮性誌　五三卷二號……大隈敏夫

一四二、皮膚科領域に於ける血中 Glutathion（第三篇　實驗的家兎梅毒に於ける血中 Glutathion）皮性誌　五三卷二號……高岡弘道

一四三、皮膚科領域に於ける血中 Glutathion（第四篇　肝障害時に於ける血中 Glutathion）皮性誌　五三卷二號……高岡弘道

一四四、皮膚科領域に於ける血中 Glutathion（第五篇　血中 Glutathion と Salvarsan との關係特に副作用の豫防に就て）皮性誌　五三卷三號……高岡弘道

一四五、諸種サルバルサン劑を以てする感作實驗並に其の局所皮膚組織に就て　皮性誌　五三卷三號……大隈敏夫

一四六、ボルフィリン尿と肝臟機能　皮性誌　五三卷三號……木村支雄

一四七、結節性紅斑の組織學的研究　皮と泌　五三卷四號……青島盛

一四八、頑固なるヴィダール苔癬自己治驗例　實驗醫報　二〇卷四號……和田智來

一四九、癩と食品　臨皮泌　八卷四號……和田智來

一五〇、臨床的に殆んど治癒したと思はれる癩患者の血清化學反應　レプラ　一四卷三號……和田智來

一五一、皮膚疾患に於けるボルフィリン尿の治療　皮と泌　一一卷三號……木村支雄

一五二、皮膚疾患に於けるアセチールヒヨリン吸入による氣管支反應　皮と泌　一一卷三號……岡元健一郎

一五三、プリングル病に就て　皮と泌　一一卷三號……吉田重春

一五四、ヴィダール苔癬の原因考察　皮と泌　一一卷三號……和田智來

一五五、釀母菌（分芽菌）の酵素に關する研究（第二篇）皮性誌　五三卷六號……奥野勇喜

一五六、釀母菌（分芽菌）の酵素に關する研究（第三篇）皮性誌　五三卷六號……奥野勇喜

一五七、椰子油の鼠癩に對する効果並に鼠癩菌培養に關する實驗追補　レプラ　一四卷四號……樋口謙太郎・和田智來

一五八、ヘマトポルフィリンの發毛作用　皮性誌　五四卷一號……木村支雄

一五九、Myxotrichum Kunze（Gymnoascaceae）による斑狀落屑性白癬　其の一、症例並に菌學的所見　皮性誌　五四卷一號……樋口謙太郎

一〇六〇、Myxotrichum Kunze (Gymnoascacea) による斑狀落屑性白癬　其の二、培養菌の人體並に動物接種試驗　皮性誌　五四卷一號 …… 樋口謙太郎

一〇六一、釀母菌の酵素に關する研究　（第四篇　澱粉分解酵素研究補遺、第五篇　澱粉分解酵素に就て第六篇　澱粉分解酵素に就ての研究補遺）皮性誌　五四卷一號 …… 奥野勇喜

一〇六二、釀母菌の酵素に關する研究（第七篇　蛋白分解酵素（Tripsin）及糖分解酵素（Maltase, Lactase, Saccharose）（第八篇　釀母菌の酵素學的研究綜說）皮性誌　五四卷二號 …… 奥野勇喜

一〇六三、腦下垂體性羸瘦症に併發する皮膚色素沈着症の一例　皮と泌　一一卷四號 …… 奥野勇喜

一〇六四、皮膚疾患に於けるポルフィリン尿と糖代謝との關係　皮と泌　一一卷四號 …… 木村木支雄

一〇六五、サルワルサン疹に於ける氣管支反應及び諸檢査に就て　皮と泌　一一卷四號 …… 岡元健一郎

一〇六六、脂腺癌　皮と泌　一一卷四號 …… 荒川忠良

一〇六七、所謂長江浮腫、特に其組織像に就て　皮と泌　一一卷四號 …… 樋口謙太郎　井上忠彦

一〇六八、黴毒患者の血中食鹽量に就て　皮と泌　一一卷四號 …… 和田智來

一〇六九、癩性斑紋に就て　レプラ　一四卷五號 …… 吉田重春

一〇七〇、無子囊性釀母菌（分芽菌）の分類に就ての考察　皮性誌　五四卷三號 …… 奥野勇喜

一〇七一、無子囊性釀母菌の分類に就ての考察（續報）皮性誌　五四卷四號 …… 奥野勇喜

一〇七二、熱帶潰瘍の組織內細菌　皮と泌　一一卷五號 …… 望月仁三

一〇七三、リール黑皮症の二例　皮と泌　一一卷五號 …… 和田智來

一〇七四、過去十年間の外來患者に於ける餅食の濕疹類に及ぼす影響に就て　皮と泌　一一卷五號 …… 松山龜之助

一〇七五、酒皶、毛囊虫性痤瘡並に尋常性痤瘡患者の自律神經機能檢査成績に就て　皮と泌　一一卷五號 …… 吉田重春

一〇七六、所謂はたけ及び白粉まけ並に本症及び化粧品に於ける Benedek 分裂糖菌の培養成績皮と泌　一一卷五號 …… 荒川忠良

一〇七七、中毒性脫毛症　皮と泌　一一卷五號 …… 木村木支雄

一〇七八、病原性絲狀菌並に絲狀菌性疾患の概念　皮と泌　一一卷五號 …… 樋口謙太郎

一〇七九、皮膚科外用劑と細菌　皮と泌　一一卷五號 …… 和田智來

一〇八〇、レントゲン線と Histamin　皮性誌　五四卷六號……光本重信
一〇八一、急性紅斑性狼瘡の一例　皮と泌　一一卷六號……木村木支雄
一〇八二、顏面血管擴張症特に其毛囊虫寄生に就て　皮と泌　一一卷六號……吉田重春
一〇八三、パラフイノームの一例　皮と泌　一一卷六號……桃島強一
一〇八四、皮膚疾患に於けるザンブリニ渡邊反應の成績に就て　皮と泌　一一卷六號……松山龜之助
一〇八五、皮膚疾患に於ける血清反應、氣管支反應、ストーム反應三者の比較　皮と泌　一一卷六號……岡元健一郎
一〇八六、油と細菌　皮と泌　一一卷六號……和田智來

昭和十九年

一〇八七、紫外線と Histamin　皮性誌　五五卷一號……光本重信
一〇八八、アンチビリン疹の組織學的研究　皮性誌　五五卷一號……青島盛
一〇八九、皮膚釀母菌の Vitamin B 含有量　福岡醫誌　三七卷三號……樋口藤謙太郎
一〇九〇、所謂分裂糖菌症（ベネデク）に關する研究　福岡醫誌　三七卷四號……伊川忠良
一〇九一、餅の濕疹樣皮膚炎に及ぼす影響（血糖との關係）皮性誌　五五卷四號……荒松山龜之助
一〇九二、酒皶、手囊虫性痤瘡に就ての知見補遺　臨床と研究　二一卷五號……吉田重春
一〇九三、酒皶、毛囊虫性痤瘡並に顏面血管擴張症の肝機能　臨床と研究　二一卷四號……吉田重春
一〇九四、餅の濕疹樣皮膚炎に及ぼす影響（二、米飯食と血糖との關係）皮性誌　五五卷五號……松山龜之助
一〇九五、血清各種蛋白成分による血清皮內反應に就て　福岡醫誌　三七卷五號……岡元健一郎
一〇九六、サルベルサン解毒實驗　臨牀と研究　二一卷五號……高岡弘道
一〇九七、食鹽水及び葡萄糖液の海猥補體價に及ぼす影響　皮性誌　五五卷六號……井上忠彥
一〇九八、梅毒患者並にサルベルサン注射後に於けるザンブリニ渡邊反應　臨牀と研究　二一卷六號……松山龜之助
一〇九九、白癬菌培養に關する小實驗　臨牀と研究　二一卷六號……奥野勇喜

二〇〇、廣東地方の熱帶潰瘍（第三報）臨牀と研究　二一卷六號……望月仁三

二〇一、サルバルサン連續點滴注射法に關する實驗的研究　福岡醫誌　三七卷七號……井上忠渉

二〇二、鼠癩の血液脂質量　レプラ　一五四號……荒川義一　高阪忠良郎

二〇三、大量脂肪投與の鼠癩に及ぼす影響に就て　レプラ　一五卷四號……荒川義忠　高阪良郎

二〇四、血清皮内反應のアレルギー學的諸檢査成績　臨床と研究　二一卷七號……岡元健一郎

二〇五、醱母菌を檢出せる護謨腫性潰瘍の一例　臨床と研究　二一卷七號……奥野勇喜

二〇六、陰莖の脂腺癌　臨皮泌　十卷一號……高岡弘道

二〇七、餅食の皮膚感受性に及ぼす影響　臨床と研究　二一卷八號……松山龜之助

二〇八、アチドージスとアルカロージスとの海猴補體價に及ぼす影響　皮性誌　五五卷九號……井上忠彦

二〇九、性ホルモン、ビタミンC及びヒスタミン解毒劑の海猴補體價に及ぼす影響　皮性誌　五五卷九號……井上忠彦

二一〇、自律神經毒及び發熱の海猴補體價に及ぼす影響　皮性誌　五五卷九號……井上忠彦

二一一、臟器ルエチン反應　臨牀と研究　二一卷九號……椛島強一

二一二、酒皶及び其の他二、三疾患の毛囊蟲檢索成績並に其組織學的所見　臨牀と研究　二一卷九號……吉田重春

二一三、熱帶潰瘍の治驗　日醫健保　三三九六號……望月仁三

二一四、諸種梅毒反應に對する炭酸ガスの影響　日醫健保　三三九七號……高阪義一　森田源三郎

二一五、補體に對する炭酸ガスの影響（殊に動脈血と靜脈血について）日醫健保　三三九八號……高阪義一　森田源三郎

二一六、サルバルサン類の鳥型マラリアに對する影響　臨牀と研究　二一卷一〇號……荒川晴忠　中山道良

二一七、アルコールの鳥マラリアに對する影響　臨牀と研究　二一卷一一號……荒川晴忠　中山道良

二一八、淋巴腺細網肉腫症　臨牀と研究　二一卷一一號……山崎峻

二一九、人工的皮膚炎家兎の血液像に及ぼす餅食の影響　臨牀と研究　二一卷一二號……松山龜之助

二二〇、サルバルサン副作用特に血液像に就て　臨牀と研究　二一卷一二號……本康宗基

二二一、鳥マラリアのゲルマニン療法　臨牀と研究　二一卷一二號……荒川晴忠　中山晴忠　道良

昭和二十年

二二二、皮膚血管の結核アレルギー　第一篇　家兎耳翼動脈内抗元再處置の實驗（第一―第三實驗）臨牀と研究　二二卷二號……古賀公吾

二二三、健康者並に濕疹樣皮膚患者の餅食とその血糖との關係に就て　臨牀と研究　二二卷二號……松山龜之助

昭和二一年

二二四、鳥型マラリアに對するサルバルサン類並にキニーネ併用療法　臨牀と研究　二三卷五號……荒川晴忠　中山晴忠　道良

二二五、數種アンチモン劑の鳥型マラリアに對する影響　臨牀と研究　二三卷九號……荒川晴忠　中山晴忠　高森通夫

二二六、膿疱性疥癬の檢索　臨牀と研究　二三卷九號……齋藤金之助　古川宰

二二七、牛肉罐詰食による中毒性皮疹に就いて　臨牀と研究　二三卷十號……原田庭暢　大川寛三

二二八、食鹽投與の鼠瘰發症に及ぼす影響　臨牀と研究　二三卷十號……荒川阪義忠一　高荒良郎

二二九、榮養と皮膚疾患　臨牀と研究　二三卷六號……山崎峻

二二〇、戰爭と疥癬　治療　二八卷九號……荒川忠良

昭和二二年

二二一、藥物性皮膚炎（特にヂニトロクロールベンゾール皮膚炎）の研究　福岡醫誌　三八卷二號……弘中哲也

二二二、性病の現況と其對策　體性　三二卷三號……荒川忠良

九大皮膚科十七年間の主なる業績回顧

皆見省吾

緒言

昭和六年四月當教室に赴任し、二十三年四月退官に至るまで滿十七年間皮膚科主任の席を汚し、大した功績も殘し得なかつたことを御詫し、新進氣鋭の士が第三代教授として教室を盛り立てられんことを切望する。

當教室は故旭博士が創立されて立派な教室とされたため余も非常に都合よく勤められたのを感謝する。ただ余の赴任後聊か教室のために盡したことを述べると、ラジウムが筒形一本と添面一個であつたのをセル四〇瓩、添面二〇瓩追加し、レントゲン機は表面治療機、深部治療機、シャウル機を購入し、太陽燈四、ソラックス二、石英燈二、グレシャウス機一、無熱石英燈一、超短波機一を設備したが、年月の經過と疎開騒ぎのため余とともに老い朽ちたものもあるのは誠に遺憾である。蠟細工は一萬以上、組織標本は數萬枚を製作させたが、前者は暫時製作中止となつたことを御詫する。病棟の增築は時期がよかつたため看護長室と合せて四室を設けることができた。また浴室を改造して研究室一室を設けた。

業績の數はかなりあるが、教室員の業績は大體當人の仕事によるもので、すべての人に學位を世話したかつたが、いろいろの都合で實現しなかつた人のあるのは誠に遺憾である。業績の内、かなりのものを掲げてみるが、學位論文が主となるけれど、その外にも目ぼしいものを拾つてみることにする。

一、濕疹類

皆見は小兒濕疹について鑑別と治療を述べ、松山は餅の濕疹に對する惡影響を證し、ことに血糖が米食とは異り、皮膚掻も增すことを實驗した。青島は旱魃の年に濕疹が少く、再發性濕疹は氣壓および氣溫の急變する際に增惡することを注意した。

古賀（賢）は香料による皮膚炎の症例を述べ、青島は女子顏面再發性皮膚炎を集め、皆見と的野はアカザ皮膚炎の特異な例を示した。また弘中は火藥製造課程中の皮膚炎を研究した。

卵白反應について宮崎、千原の研究があり、またともに卵白特異質の高度の例を示し、ストーム反應においても兩人の努力が著しく、ことに千原は鱗屑の代りに爪エキスを用いる法を考案した。光本の皮膚炎に關するヒスタミンの研究は諸種の觀點より詳細を究め、ひいてホルムアルデヒド糖液を作製して痒性疾患に應用し、皆見その他もこれを推奬した。岡元は馬血清皮内反應について獨自の實驗を試み、楠氏氣管支反應を追試した。

皆見と和田は近接放射の經驗においてとくにビダール苔癬に特効あることを述べ、和田自身の經驗でこれを立證した。皆見と伊藤は線狀神經皮膚炎について記載した。

西脇は小兒ストロフルスについて詳細に報告し、古賀（賢）は黑色標記症を說明し、皆見と岡元はただ一個の色素性蕁麻疹を發生した例を擧げた。

一、藥疹

アンチピリン疹について青島は詳細に研究し、皆見と奥野はミグレニン疹、皆見と和田はキニーネ疹、皆見と青島はペロナール疹について記述し、臨床上アンチピリン疹としばしば混同されるこれらの皮疹について解說した。

皆見と田中はテラポール治驗を始めて報告したが、皆見と青島は

スルファミンの副作用を説明し、なおスルファミン限定疹とサルバルサン固定疹を例證した。

一、紅　皮　症

皆見、桑野、川口はペラグラに對するニコチン酸の効果を比較的早く報告した。

皆見と大橋は急性剝脫性紅皮症について說き、なお大橋は亞急性剝脫性皮膚炎について詳述し、皆見と安藤は先天性魚鱗癬樣紅皮症を說明した。

藤村と荒木は珍らしい對稱性肢端紅斑を擧げた。

ガス斑について丸山は臨床的に追求して一酸化炭素の中毒に基因することを證明した。

一、色　素　異　常

眼瞼肝斑について皆見と和田が說明して普通の肝斑より區別し、皆見と岡元は卵巢ホルモンにより却つて黑變する例を揭げ、長谷川ならびに奧野は血管擴張性黑色症なる珍奇な例を示した。青島は原因不明の色素斑すなわち特發性後天性色素沈着症を蒐集し、和田はわが國で始めてリール黑色症を報告し、野間は女子顏面黑色症について研究しつつある。

一、水　疱　症

皆見はヂューリング皮膚炎の症例を擧げ、田村は、ヨード酸鹽の皮內反應を自ら考案して詳細に研究した。荒木は成年性急性天疱瘡の例を報告し、岡元は開口部糜爛性外皮症の例を示した。

一、潰　　瘍

皆見はレントゲン潰瘍、皆見と西脇はレントゲン癌を記載し、望月は熱帶潰瘍について詳細に研究した。皆見、大橋、堅山はわが國の侵蝕性下疳についてヂュクレイ菌によることを說き、和田は皮膚欠損症の珍奇な例を發表した。

一、膿菌と膿皮症

村本は皮膚の膿菌を研究し、とくにエプスタイン法をクリスタル紫以外の紫色素で起ることを發見した。一木は膿瘡ならびに膿痂疹の細菌について研究し、概して治りにくいものに連鎖球菌が存在するという。

項部息肉性毛包炎について皆見と石黑が發表して頭部乳頭狀皮膚炎なる名稱に優るとし、皆見と青島は項部癤症について述べ、かつ女子顏面毛包炎癤症を獨立せしめ、皆見と松山は須毛部ボックハルト膿痂疹を說明した。

皆見および旭は毛包虫性酒皶を記述し、村本は酒皶に存する葡萄球菌の毒力が弱いことを記載した。皆見と旭は酒皶ならびに顏面毛細血管擴張症、ついで皆見と桑野は毛包虫性痒瘡ならびに酒皶の關係に言及し、加生、光本、吉田は顏面諸所の毛包虫を檢索し、なお吉田は、酒皶、毛包虫性痒瘡ならびに顏面毛細管擴張症について詳細に研究した。

一、角　化　症

皆見と加生は散在性手掌足底角化腫の本邦第一例を述べ、皆見と大隈は慢性苔癬狀粃糠疹を記し、皆見および奧野は扁平紅色苔癬の治驗を述べて開腦放射よりも局所放射の優れることを說いた。

乾癬の病理と療法について皆見が記載し、また膿疱性乾癬の例を揭げ、皆見と下山は痘瘡樣乾癬の例を示した。

皆見と藤村は紅斑性狼瘡の治療について記載し、富川および高岡は本症上に發生せる癌の症例を報告した。

大橋は淋菌性角化症の一例を記述した。

一、萎　縮　症

わが國始めての皮膚弛緩症の一例を皆見と川口が解說し、皆見と川上は萎縮性禿髮、皆見と青島は血管性變形皮膚萎縮症を記載し

た。

一、腫　瘍

皆見と古畑は多發性毛包囊胞症が奇形に屬することを述べ、皆見はこれに似て非なる粥腫症を記し、皆見と樋口は紅色肥厚症、樋口と光本は皮膚骨腫例を記述した。

一、毛　髮

青島は先天脱毛症の例を擧げ、木原はタリウム内服、電氣分解、電氣凝固法、藥劑塗布、レ線などによる家兎の脱毛實驗を行い、かつ立毛筋が表皮直下の彈性纖維に附着することを發見した。

田中、木村はボルフィリンないしアロヒリンの發毛實驗を行い、和田はこれによつて血液コレステリンの增量を認め、皆見、川口、田中、光本は圓形脱毛症に本劑の効果を推稱した。

なお木村は諸種皮膚病におけるボルフィリンを檢査し、肝障碍などに關係あることを指摘した。

一、寄生虫その他

ノルエー疥癬について皆見と石黒が報告し、竹下は犬疥癬の傳染例を示し、齋藤は疥癬の迅速療法および組織的所見を發表した。

古賀（賢）は家ダニ刺傷を述べた。

線狀皮膚炎に關しては皆見と伊藤が記述し、伊藤は隱翅虫毒を研究した。

皆見と一木は蠶尾虫の例を擧げ、樋口と井上は長江浮腫例を述べ、皆見と田中はエスブンジアについて記載し、皆見、荒川、弘中は痘瘡例を發表し、ことに自ら體驗せるいわゆる假痘ないし無疹痘について報告した。

一、分芽菌（釀母菌）

皆見、樋口、奥野は狼瘡様毛瘡の病源體が分芽菌なることを發表したが、その後の例にはこれを見ないで葡萄球菌であつた例もある。

皆見と樋口は釀母菌性間擦疹ならびに肛圍濕疹、樋口は乳兒寄生菌性紅斑、釀母菌性指間糜爛症ならびに乳輪濕疹、奥野は頑癬様鵞口瘡について說明し、樋口と津留は健康人糞便中の釀母菌を三〇％位に發見し、堅山は人體消化管内の同菌を檢して内容の酸性なる部に多いとし、今井は健康および病的皮膚における同菌を檢し、さらに新産兒と母の唾液、糞便などの菌を調べ、樋口は母子の唾液と糞便における同菌を兩者の大部分に檢出した。津留は口角糜爛症が該菌によることを證明し、樋口は同菌の動物接種實驗を試みて鵞口瘡菌と同一なることを立證し、かつ樋口と伊藤は釀母菌のビタミンB含有量を測定した。奥野は釀母菌の諸種酵素を測定し、また嫌氣狀態において不全菌糸を形成することを見て本菌の生活史と分類を企てた。

皆見と原はわが國に珍らしい白癬性毛瘡例を示し、今井と鍾田は甚だ珍奇な汎發性結痂性白癬の一例を報告し、皆見は白癬菌の殺菌實驗を行つてヂシドリンを製した。樋口は Gymnoascaceae による斑狀落屑性白癬の稀な例を發表した。

皆見と樋口は渦狀癬の一例、皆見および齋藤は紅色癬風を示し、かつ癬風に對してヂシドリンの卓効を述べた。

荒川は分裂糖菌症の珍らしい例を示し、ハタケなどより分裂糖菌をしばしば證明して本菌の性狀を詳細に研究した。

一、皮膚結核類

富川、西脇、川口、安藤は皮膚結核と結核疹の臨牀的檢査成績を報告し、皆見、荒川、富川は輪狀肉芽腫、皆見と吉田は光澤苔癬、古賀（賢）は血管類狼瘡、古賀（公）および荒川は瀰漫浸潤性類狼瘡の各一例をそれぞれ記載し、齋藤は下腿結核疹に併發する趾先潰瘍は結核像を示さないと發表した。

皆見と古賀（公）は結核に關係ある結節紅斑を記し、富川、西脇、川口は結節性紅斑を臨床的に觀察し、青島は本症の組織的所見を述べ、皆見と青島は本症患者の下腿皮下にツベルクリンを注射して陽性成績を證明した。古賀（公）は皮膚血管の結核アレルギーを家兎の耳介で實驗し、アレルギーを得たものに結核菌を再注射すれば結核像、ツベルクリン再注射では結核巢はなくして壞死現象を認めた。

一、癩

癩性斑紋と白斑について皆見と吉田が分類を企て、皆見、引地、早田はフックス反應を應用せる癩血清化學反應を述べ、早田、川崎は本反應の抗原その他を檢索し、池井、藤本は鼠癩における反應を研究し、和田は Folin—Florkin 保利の反應を應用し、詳細に研究してこれをほぼ完成した。早田は無鹽食療法、樋口はグルゴールの治驗を報告した。

荒川は暑熱の鼠癩に及ぼす影響、荒川と高阪は鼠癩の血液脂質量、大量脂肪または食鹽投與の鼠癩への影響を實驗した。

一、梅　毒

輸血で傳染せる第二期梅毒の例を皆見と旭が報告し、皆見と竹下は第二代の先天梅毒、皆見と堅山は梅毒性爪炎を記載した。

皆見は梅毒の診斷について記述し、大橋は誘發反應について詳記し、福田はダールの乾燥血滴反應を研究改良し、なお抗原または血清の前處置による血清反應を試みた上血清反應の鋭敏化を企てた。

各血液型における補體量、溶血素その他を吉田が比較研究し、住吉も各血液型の定量ワ反應、補體量、溶血素あるいはサ劑治療後の血壓などを比較した、森田、高阪は血清反應に對する炭酸ガスの影響を觀察し、後者によつて陽性度を增すとし、また動脈血は靜脈血よりも補體價が強いという。井上はモルモット補體價に及ぼす諸種の實驗を行つた。

長谷川は梅毒のフックス反應を研究し、和田は人および家兎における梅毒の血清化學反應を決定した。

佛島はウインのルオテストならびに自製臓器ルエチンによる反應を檢索して一程度應用し得ることを確定した。

皆見は梅毒の療法、豫後、治療などにつき數次に亘つて報告し、皆見と古賀（公）はゾルサルバルサン、皆見、千原、高岡はサルバルサン解毒實驗を行い、大隈はサ劑の感作實驗、皮膚反應などを詳細に研究し、村山はサ劑の臓器沈着を檢し、山崎はサ劑の骨髓内注射で塞栓の起り得ることを證し、井上はハイマン法を家兎で實驗した。皆見と青島はサ劑ビオトロピスムとして癲の發生する例を擧げ、本庚はサ劑副作用にはエオジン好性白血球の增加することを示し、松山はサ劑中毒の場合にザンブリニ渡邊反應が酸性に傾くことを證明した。なお高岡はサ劑注射後にグルタチオン、重松はビタミンCの減少することを實驗した。

皆見は蒼劑注射で起る蛋白尿の時に有機性水銀劑を注射しても差支がないと稱し、皆見、高岡、田中はサ劑、蒼鉛および水銀鹽の三劑併用療法を說き、奥野は諸種蒼鉛劑を家兎梅毒に使用せる成績を述べ、大橋と木村は金劑の驅梅作用、千原はスピロヘータに對するグルゴールの實驗、皆見と丸山はゾルガナールBの驅梅實驗、皆見は皮膚科における金製劑の應用を述べた。和田はロジウムの驅梅作用を實驗して相當の成績を擧げた。

皆見、高森、和田は强力療法の成績を數回に亘つて報告し、これがわが國における强力療法の導火線となつた。

皆見と和田は性病の社會における浸淫率を調べ、津田と丸山は梅毒患者の大動脈、古賀（公）は肝機能、松岡と古畑は視器變化、寺師と丸山は聽器機能について調査し、ことに治療との關係を探究し

た。古賀（賢）と住吉は血液型と驅梅成績を調べて血液型による治癒の差異がないという。

一、ビタミン

皆見は皮膚疾患に對するビタミンの應用について述べ、皆見、富川、小尾はビタミンDを慢性潰瘍の局所に使用して効果を認め、重松は皮膚のビタミンCを測定した。

一、レントゲン線

奥野は近接放射、奥野と椛島は間腦放射の治驗例を報告した。

一、雜

古賀（賢）は皮膚の類脂を組織的に研究し、青島は體表面積の測定法、色調の表現法、發疹の形狀ことに呈圓性を述べ、高岡は皮膚病のグルタチオン、荒川は榮養と皮膚病について發表した。

また皆見は蠟標本の製作法と歴史を記述した。

一、マラリア

戰時中マラリアに對して注射劑の應用を試みることになり、荒川と中山がサルベルサン、アルコール、ゲルマニン、アンチモンなどをカナリアのマラリアに實驗した。

一、著　書

余は岡山醫大在任中より著書に心がけていたが、九大に赴任後實を結んだ。すなわち皮膚病梅毒學、皮膚科泌尿器科診療の實際、婦梅毒ならびに先天梅毒の療法、花柳病の話（高木博士共著）、梅毒の療法、梅毒の最新療法、蕁麻疹の療法、梅毒の診斷と治療などを著述した。

結　辭

余は教室員の業績について多角的に研究して貰つたが、分芽菌と梅毒の療法にはとくに力を入れるようになつた。余はベルリンで癌の糖分解を實驗して化學的業績を遂げたが、もともと化學者ではなく、細菌學にも造詣はなく、ただ臨床ならびに組織所見に多少の自信を持つに過ぎない。したがつて教室員の仕事は各自の努力研究によるものが多い。

また旭門下の發表されたものをさらに擴延せんと聊か努力して線狀皮膚炎、毛包虫性痒痛などを追究した次第である。

余がなお教授の職に留まつても徒に惰性で過すに過ぎない。新進の士が建て直しを行われんことを切望する。

前九大教授醫學博士皆見省吾先生御功績

皆見省吾前教授は大正三年七月三日第四高等學校第三部を卒業し直ちに東京帝國大學醫科大學に入學、同七年十二月廿六日優秀の成績で卒業、翌八年一月同大學皮膚科泌尿器科學教室、故土肥慶藏教授の門に入り、副手を經て同十一年四月八日同大學助手に任ぜられた。その後直ちに文部省在外研究員を命ぜられ、主としてドイツに滯留、特にベルリン、カイゼルウイルヘルム研究所ワールブルグ教授の下で癌の代謝を研究し、ウイン、パリー、ロンドン、アメリカ等を歴訪して同十三年八月三十一日歸朝された。同年十月九日岡山醫科大學教授に任ぜられ、初代教授として皮膚科泌尿器科學講座を擔任、同十月二十八日醫學博士の學位を授けられた。その職にあること六年有半、昭和六年四月六日日本皮膚科學會會頭故旭憲吉教授の後任として迎えられて九州帝國大學教授に轉じ、皮膚科泌尿器科學第二講座を擔當、昭和十一年三月廿八日講座の分離せられた際に

皮膚科學講座を擔任、後九州大學醫學部專門部講師、熱帶病研究所々員、九州大學醫學部教員適格審査委員、九州大學教員適格審査委員、醫師國家試驗委員等を歷任された。昭和二十三年四月三十日依願本官を免ぜられるまで九州大學に於て十七年有餘、前後を通じ教授の地位にある事二十有四年、この間誠意以て學生の指導訓育に盡瘁し、他方自己の研究は勿論、門下教室員の研究指導に寧日なく、我國學會に寄與する所絶大にして世界斯學に貢獻する所亦偉大である。又教授在職中殊に昭和十七年六月三日より昭和十九年六月四日迄九州大學醫學部附屬醫院長に補せられて率先院務に精勵され、この間九州大學評議員の要職を兼ね、惠愛團副團長として團の改革發展に奔走する等九州大學に殘した功績は實に偉大なものである。

皆見博士は資性至直溫厚の人格者にして頭腦明晰且つ努力の人であつて、冷靜着實、よく大局を把握して誤らず、獨創の才に富み熟慮して斷行し、目的を達せねば止まない性質があり、率先躬行弟子を指導して方途を誤らしめず、緩急宜しきを得て抱擁力に富み、門下生を愛する事實子の如く、その眞摯な擧止はよく長上、同僚、後輩、門下生及び學生の崇敬の的となり、信望を一身に集めて膝下に教を乞ふ者跡を絶つ事なく、同博士の在職中九州大學發展に貢獻した所甚だ大である。以下同博士の功績を教育、學術、社會の部門に大別し、その概略を述べる。

一、教育上の功績

皆見博士は岡山醫科大學及び九州大學に在職中學生生徒に對して難解な皮膚科學の一般を了解せしめるために多大な努力を傾注し、豐富な學識、經驗をもつて懇切明快な說明を加え、錯綜した皮膚病學に一新分類法を採用して理解を容易ならしめた功績は實に偉大である。同博士著書「皮膚病梅毒學」は實にその努力の結實したものであつて現今世界の最高峰を占め、好評江湖に嘖々として洛陽の紙價を騰め、斯學專攻者にして本書を手にしない者は無い現狀である。博士の學生を訓育するに當つては終始嚴正、德を以て導き、個性を生かし、その嚮ふ所を誤らしめずして、門下生を指導する時は己を空しうして率先垂範、嚴父の威、慈母の愛を以て鵬下に孵育し、終生庇護の勞を取つて厭わず、九州大學教授在職中同博士の直接指導した者一五三名、內醫學博士の學位を得た者四九名に達した事實はこの間の事情を物語る一事例であつて、一度び同博士の薰陶を受けた者で同博士の德を深く敬慕しないものは一人もない。

その外皆見博士は學內に於ては熱帶病研究所の設立に參劃した。昭和十九年五月十日同所員を委囑せられて輝しき業績をおさめ、醫學部教員適格審査委員、次で昭和二十二年六月十六日以降は九州大學教員適格審査委員として教育の自由尊嚴の保持に努め、九州大學醫學部泌尿器科學講座、衞生學講座、放射線治療學講座、産婦人科學講座、第一外科學講座等の擔任後任教授の詮衡に當り、醫師國家試驗制度の制定せられるに及んでは昭和二十二年五月十四日同試驗委員を命ぜられて本日に及んだ。學外に於ては福岡醫學商學專門學校の創立に縱橫の活躍をとげ、また學術研究會譚委員として、日本醫學輯報の編纂委員を委囑され、かねて日本學術振興會第二十二回小委員會委員として風土病研究に盡し、同會第四常置委員として奔走する等、學會の爲寄與する所絶大であつて、且つ同博士が九州大學に於て教育主修め得た功績は洵に大なるものと云わねばならない。

二、學術研究上の功績

皆見博士は昭和六年四月六日九州大學教授に任ぜられて、皮膚科泌尿器科學第二講座を擔當し、次で昭和十一年三月二十八日皮膚科學講座擔任に轉じ、爾來退官に至るまで終始皮膚病梅毒學の研究に從事されたが、それ以前即ち大正八年一月八日東京大學副手として

故土肥慶藏教授に師事してから岡山醫科大學教授辭任に至る間は皮膚科學、梅毒學は勿論泌尿器科學に關する業績をも發表し、その研究部門は皮膚科學、泌尿器科學、癩、梅毒學の各方面に亘り頗る廣汎多岐且つ深遠にして、單行本として其眞價の世に問われたもの七、自著論文のみでも八七五篇、直接指導の下に門下の名を以て公表せられたもの八七五篇に達した。

皆見博士がワールブルグ教授の下に於て試みた癌組織の呼吸及び糖分解に關する研究は實に一新紀元を劃する大業績にしてワールブルグがノーベル賞を授與せられた研究の中核をなすものである。しかし同博士が在職中常に念頭に置き研鑽を續けたものは梅毒の治療に關する業績である。即ち化學療法の眞髓は强滅菌療法にあるとの觀點より如何にして大量のサルバルサンを注射し得るかにつき着實なる研究をとゞけ、遂に加溫血清溶媒法を創始した。本法こそ世に皆見法として喧傳さるる方法にして現在に至るまで未だ本法を凌駕する良法がなく、吾國に於ける大量療法の濫觴である。これ實に大正十四年の事にして本法を敷衍して三劑併用療法となり、更に短期療法となり、遂に現在の大量强力療法として發展したものとなつた。本法はホフマン極量療法、ハイマン大量點滴療法等に比すれば遙かに優る方法にして近時試み始められた數氏の大量療法は實に本法に由來することを思えば同博士の梅毒學會に占むる功績は絶大にして九州大學發展の爲に大いなる貢献をなしたものと云わねばならぬ。この間の基礎的研究としてサルバルサンの肝機能、細網内皮系、循環器系に及ぼす影響、サルバルサン血の物理化學的性狀、サ劑の臓器沈着を明かにしてサルバルサン過敏症の本態を窺ひ、又治療の不足による抗サルバルサントリパノゾーマ株の生成に成功する等その業績は偉大にして、その他梅毒の一般及び診斷に關する研究に至つては枚擧にいとまない狀態である。其他皆見博士は皮膚科學各分野に亘り利用すべき無數の業績を殘したが、その主なるものについて見ると、帶狀疱疹については濾過性病原體を細胞内に證明、免疫學的實驗に成功し、圓形脱毛症の病理を考究してコレステリンとの關係に着目し、ヘマトポルフイリンの發毛作用を治療に應用して輝しい成績を修め、更にヘマトポルフイリンと皮膚疾患との關係を究めた。その他皮膚化膿菌に關する研究より發展して膿痂疹、膿瘡の病因を探り、分芽菌及分裂糖菌症に關しては深くその本態を追究して殊に前者に於ては樋口氏とともに本症を九型とする新分類法を提示して一新境地を開拓し、又分芽菌性肛圍濕疹は同博士の命名にかゝり、津留氏とともに口角糜爛症の原因を分芽菌と斷じ、毛瘡樣狼瘡に分芽菌を證明する等その研究は現在學界の最高峰を行くものにして、毛嚢虫に關する新見解についても學界の均しく認むる所である。九州に特有な所謂線狀皮膚炎の病因に關しては伊藤氏とともに陰翅蟲の生態より有毒物質の抽出に成功した。或はアレルギー學説を逸早く採用して基礎的研究を行い遂にアレルギー性皮膚疾患を獨立せしめ、皮膚結核アレルギーに發展し、硬結性紅斑と結節性紅斑の異同に論及し、亞急性エリテマトーデスを獨立せしめ、皮膚色素に關する研究は遂に色素の異常及び瞼肝斑の命名となり、顏面黑色症を探り、女子再發性顏面皮膚炎、女子顏面毛嚢炎癤腫症、粥腫症等を獨立命名する等、皮膚科各領域に足跡の及ばないものなく、また重松、高岡氏等と行つたビタミンC、グルタチオンに關する研究は遂に梅毒の大量療法に直結し、光本、木村氏等と企てたヒスタミン、ヘマトポルフイリンに關する研究は直ちにホルモール葡萄糖並にアロフイリンとして治療に應用せられ、冷凍治療界に於ける皆見式雪狀炭酸治療器、爪白癬における皆見式爪削器は廣く世に賞用せらるる所である。殊に早田、和田氏等と研究の結果癩の血清診斷に用いらるるM・H・H反應は同博士の着意によるものでその確實な

事他にその比を見ない同博士の獨創力を物語るものである。以上は皆見博士研究の一部にして、何れもその全貌に至つては筆舌に盡すことは出來ないが、學會に貢獻した所甚だ大にして實に岡山醫科大學、九州大學在職中の努力の精華である。しかも最も圓熟しその名を稱揚せられたのは九州大學在職期間中であつたことを思えば同博士の九州大學に於ける功績は特に顯著なものといい得る。

三、社會醫學上の功績

皆見博士は上述の如く大學にあつては學生生徒の訓育に、門下生の指導にまた自己の研究に專念する傍ら廣く社會に進出して斯學の向上に、はたまた一般の啓蒙に偉大な貢獻をした。例えば昭和六年四月九州大學教授として着任するや直ちに長崎醫科大學及び熊本醫科大學と連絡して九州三大學連合皮膚科泌尿器科九州集談會を結成し、同年六月早くも第一回集談會を福岡の地に開催、爾來開會十二回免官に至るまで終始九州の斯學向上に盡し、また日本皮膚科泌尿器科學會福岡地方會を主宰し今日まで回を重ねる事五八回、同會今日の隆盛を來したのは皆見博士の努力に負う所尠くなく、また同博士は學問の進歩向上の爲には研究施設と共に發表機關の完備は一日も忽にすべきでないと考え且つ九州地區にかかる機關のないことを憂い、故高木名譽教授と相はかり遂に昭和八年二月九州大學皮膚科泌尿器科教室より醫學雜誌「皮膚と泌尿」を創刊し、昭和十九年十月、政府の出版決戰體制確立の要請に應じて廢刊に至るまで實に十有一年の間同誌主幹として身を以て編輯に當り、幾多の困難を打破し皮膚科泌尿器科の一流誌として天下の耳目を聚め、有終の美を納めさせたことは實に同博士の熱意と努力に負うものにして同博士の功績絶大なものと云わねばならない。更に昭和十四年十月十二日以降學術研究會議より日本醫學輯報の編纂委員として活躍し、また昭和七年以降は「臨牀と研究」誌の監輯として、また福岡醫學會誌の再刊に當つてはその庶務幹事として一般醫學知識の向上に努め、學術講演會には進んで協力し、激務の傍ら「皮膚病梅毒學」「妊婦梅毒並に先天梅毒の療法」「梅毒の療法」「皮膚泌尿器科診療の實際」「蕁麻疹の療法」「梅毒の最新療法」等多數の著作を物して以て學術の進歩向上に寄與した功績は尠くない。又昭和十年十一月より翌年二月までジャワ、マレー、シヤム、マニラ、香港、廣東等を歴訪して南洋醫學を視察し、歸朝後南方事情を紹介し、十四年九月より十月まで中華民國に診療班として出張し、天津に於ける水害直後の難民を診療、その功を稱えられたこともある。また同博士が外遊中寸暇を惜み、恩師土肥慶藏博士の名著「世界梅毒史」を獨譯して、その名を世界に擴め、その結果土肥博士の學士院賞受領の榮譽に與つたことは隱れた美談となつている。他方故高木教授との共著「花柳病の話」を刊行し、或は通俗講演會の招きに應じて、又新聞雜誌を通じて一般社會に對し皮膚病學、瘋及性病豫防に關する醫學常識を涵養、協力する等、この方面に於てもまた多大な貢獻をしたと云わねばならない。（荒川記）

皆見教授御退職講演會、記念式並に謝恩會記事

（昭和二十三年六月二十七日）

昨日まで降つていた梅雨が今日は晴れ、風さへ吹いて先生の德を讃えている。

受付は教室玄關に設けられ、謝恩會宴會費五百圓徴收の外に米酒までも集めねばならないとは情ない時勢である。午前十時頃早くも遠く廣島、鹿兒島

よりの第一陣參會者が到着す。何かにつけ不便不自由を感ずるこの頃先生を慕う弟子達は今日のお別れに續々各地より馳せ參じた。

主として經濟的事情により職を退き一開業醫となられた先生は弟子にも患者にも慈父であり、斯學の泰斗であられた。その先生を市井に送り出さねばならなくなつた世情を私共は呪い慨嘆した。そして先生との別れが私共教室員には肉親との別れ程に思われた。近いうち先生の診療所が建つまで、先生は市内某病院の一部を借りて診察される。間もなく門前市をなして患者の雲集する日も近かろう。四月を最後に教室を去られてから已に丸二ヶ月、あの當時の悲しみは消え、私共は專心先生の御健康と御榮榮を祈つている。

皮泌科講堂を式場、先生の御近影を飾つて午後一時半開式す。參會者漸く堂に滿ち、自遠會内輪の行事としたのに福田學部長、層畑教授等も御出席になる。

一、開會の辭　　望月助教授
二、講演　演題「九大皮膚科教室に於ける十七年間の業績回顧」　　皆見前教授

記念講演會

記念式

一、開會の辭　　富川教授
二、醫學部長御挨拶　　福田教授

（要旨）私今日學部長として醫學部を代表し皆見前教授に感謝とお祝いの辭を申し述べたい。實はこの會は、先日荒川助教授がお見えになり、皆見教授の御希望により自遠會内々でしたい、とのお話であつたが、私はそれを聞いた以上默つておれず御挨拶に上つた次第であります。

皆見教授十七年間の御業績は私少し遲れて參つたので、その講演を全部聞いておりませんが論文二八三篇、指導研究論文八百余篇で、その論文は皮膚科全般に亘り、間口が廣いのみならず奥行も深いのであります。

特に梅毒に關しては大正年代より今日まで一貫して研究せられ「皆見式强力療法」は最も偉大な業績と私專門外の者であるが考えている。皆見君は學問的感覺鋭く、その核心を把握し、伸縮性に富んだ學者と考えている。特にアレルギー說起るや早くよりこれをとり入れて研究しておられる。之に關しヒスタミンがアレルギーを起すとの說に對し、ホルモールッカーを作つて早速臨床に應用された。

皆見君の學生指導數二千余名、門下生百五十余名、學位受領者四十九名の多數を數え、これを見ても學會に寄與された所大なる事がわかる。私が學部長新任當時にも辭意をもらされた事があり、その時は漸くお引留めする事が出來たが、今回は種々御理由もおありであつて、終に御留任願う事が不幸にして容られなかつた。然し醫學本來の目的はこれを病者に應用し、人を癒す事にあるのであるから眞の醫學の目的に向つて邁進されるのであるとも考えられ、又わが國の醫學が歐米のそれより劣るという感じを與えるのは、日本醫學の最高レベルは世界的レベルにあるにも拘らず一般はその基盤が見劣りする爲ではなかろうかと思う。この點より考えて、皆見君が一開業醫となられても經濟事情が許すようになられたら個人研究所を開かれて、益々斯學の爲に御盡力されん事を切望して已みません。

去る六月、教授會に於て皆見君の功績を讃えて滿場一致九大名譽教授に推薦する事に決定しましたので、本日この席上で御披露致します。

御健康と今後の御活躍をお祈りして私の挨拶を終ります。

三、自遠會代表挨拶　　本間先生
四、祝電披露　　村山（岡山）奥野（直方）吉田（柳川）池井（熊本）
五、記念品贈呈　　布施先生
六、謝辭　　皆見前教授

暑いのに拘らず澤山お集り下され、又先刻は學部長その他諸氏から私としては身に餘る辭を賜り感謝致します。

皮膚科の發展は私の力ではなくて、教室員の力によるものであります。論文は成程多かつたですが、中にはつまらぬものもあり、「皮膚と泌尿」を教室が刊行した爲論文の多い理由ともなつています。私としては過去十七年間を大過なく過させていたゞいた事を幸いに思つています。皮膚科新病棟は私

の院長時代に建つたもので、醫學部で最も新しい建物です。これは神中院長時代に建築を願つていた所運良く豫算が可決されて實現したものです。

最近鬼頭君が九大風雪記を書いていますが、その中に所々「沈香も焚かず屁もひらず」という文句を書いています。「私もこの類に屬するかも知れません。この度辭職に際し、皆さんの留任運動には感謝しています。私が留まりましても惰性で行くのでして、新進氣鋭の若い方に席を讓つたが良かろうと思つています。私は今後も當地に止ります故どうぞお見捨てなきようお願いします。又この度は身に餘る記念品をいたゞいて厚く感謝致します。これを以て謝辭と致します。

七、閉會の辭　荒川助教授

八、會計報告　荒川助教授

謝恩會

於東公園内十日惠比須社務所

謝恩會は東公園西端の十日惠比須で行われた。公園グラウンド、龜山上皇銅像を一望に收める所。こゝは元來酒宴場とは緣の遠い場所であるが、こゝにもインフレによる社會相の悲しい場面がある。五十疊を超える大廣間に矩形の宴座がしつらえられ、さゝやかな折詰料理と、カンビン、フラスコ、サイダービン等が並んでいるが、中味は何れも酒であることは言わずもがなである。

古くは先生御着任前の門弟たる岡山醫大に於けるお弟子も見えている。定刻五時に會は始められたが、都合により御家族は今日のどの會にもお見えにならなかつた。

一、開會の辭　荒川助教授

二、祝辭　高岡博士

（要旨）皆見先生は大學を出るまで首席、優等の成績を占められた秀才であり、勉强家であられた。先生は東大を卒業せられるや土肥慶藏先生の門下に入り、間もなく文部省留學生として歐米に留學され、土肥先生が梅毒史の飜譯を先生に依頼される程の信頼をも得られていた。

先生が九大に御着任の決定しない時、高木先生が、今後來る皮膚科教授は誰か知らぬが、變人でなけりや良いが、うまく協調して行ける人なら良いがと心配しておられたのですが、いざ先生が御着任になつて、高木先生は「今度の教授は實に良く出來ておる、遠慮なく何でも相談出來、全くいいたい事がいえる」と云つてよろこばれたのであります。御着任以來私は特に御親交願つていますが、學問的にも優れておられ、性格も圓滿で、即ち學德高いお方です。そして秀才の上に寸暇を惜んで學問に勵まれる樣は、私がゴルフの御對手をした當時、ゴルフ場に通う電車や自動車の中でも專門雜誌を手からおはなしにならなかつた點からもうかゞわれます。この度先生は教育から身を引かれますが開業されても矢張り好きな學問をお止めにならないと確信しています。實に先生程時間を生かして使われる方を他に知りません。先生は當地で開業されますが、患者にとつても一大福音であります。

先生は非常に御親切で規帳面な方で、何かお願いすると、確實に翌日までには返事を屆けられる、遠くにあれば直ぐ手紙で返事されるといつた風です。

本日先生をお送りする謝恩會としましては場所も料理も粗末千萬で誠に申譯ございませんが、時節柄お許し願つて先生の門出を心からお祝いしたい。

三、謝辭　皆見前教授

（要旨）時節柄盛大な催しをしていたゞいて感謝致します。今高岡君から大變お賞めの言葉をいたゞきましたが、これは當らぬ事が多いようです。私が着任した時の歡迎會にも、着任十周年記念會にも、又今日お別れの會にも高岡君の祝辭をいたゞきました。昔は一方亭でやつたものです。今度都合で、高岡君と一緒に開業する積りであつた所を、借財して自分で獨立開業することにしました。

本日は家族も招ばれていますが、體の工合の惡いのや、息子は試驗前で、若い者に酒を飲む事を教えて貰つては困るのと、親爺の醉拂つた醜態を見せたくないのが本心で出席させませんでした。

今度私が辭めるに際し、皆さんに御迷惑お掛けして濟まぬと思つています。辭職理由としましては經濟的の事もありますが、學内刷新問題等面倒な事も起因しています。何せ年ですから若い方に讓つたが良かろうと思つてい

ます。

本日は私を餘り醉わさぬようにお願いします。

先生の謝辭あつて、盃にて乾盃し宴會に移る。

稍あつて若松の加來大先輩の提唱により自己紹介に入る。流石に今日は、學會で見慣れぬ方が相當おられる。無藝大酒家が多いようである。清酒欠乏の折本日集つた酒一斗五升、燒酎一斗以上。

酒の色が漸く顏に上る頃第一製藥の好意により、この節遠つた世界の人と思えぬ藝者五人加わり、三絃の音艶やかに會場一入活況を呈す。

皆見先生御機嫌麗しく、三味の音に乘り「秋の夜」の摺りこぎが怪しく動く。先生にこの至藝ありとは現醫局員の殆とは知らなかつた。別府の中村先生や西先生御活躍の外大した藝出ず、大量の酒に醉い足早く、八時近くには和氣藹々の裡に早くも混亂狀態となる。

さゝやかなれど、酒あり、女ありで、佳き會であつた。

自遠會よ、和やかに健かに榮えかし。

そして全員は皆見先生の御健康と發展を祈ろう。

（野間記）

昭和二十四年四月三十日印刷
昭和二十四年五月十日發行　（非賣品）

編輯兼發行者　樋口謙太郎
九州大學醫學部皮膚科教室

印刷者　大隈憲次郎
福岡市比惠明治町一丁目

印刷所　西日本印刷株式會社

發行所　九州大學醫學部皮膚科教室